2007年度「三田市史を読む会」近世資料編第２回　2007年９月８日　講義概要

開国と三田藩

講師：三田市史執筆委員　三村　昌司

１　九鬼家資料の特徴

代々家老を務めた九鬼家が所蔵している資料群(市指定重要文化財)。この九鬼家は、元は西という姓で江戸時代の早い段階で九鬼の姓を藩主からもらう。約１万点の資料が存在する。藩の行政を知る手がかりとなる藩政資料の少ない三田藩においてはそれを補完する大変貴重な資料群である。近畿地方に本拠を持つ大名の藩の政治についての研究が比較的少ない中で豊かな可能性を持った資料群である。

２　畿内における三田藩の位置づけ

三田藩は公称の藩高３万６千石の中規模の大名(一般的には、３万石以下を小規模、10万以上を大規模と規定している)。畿内に本拠地を持つ中規模の外様大名で幕末まで続いたのは三田藩九鬼氏のみ。大名の所領配置は幕府にとって戦略的な政策であるので、このことの意味は極めて大きく、三田藩の研究の中での留意点のひとつとなる。

なお三田藩の有馬郡における領地高３万石が増高によるもので、実際は２万石であることは、市史第４巻近世資料が明らかにしている。これを考慮に入れると実際の藩高は２万６千石になる。実態が小規模大名を中規模に見立てて配置した事実にも留意が必要である。

３　海防警備と三田藩の対応

資料は在江戸の九鬼隆継から在三田の父隆起への嘉永６年(1853)の書状である。これは、全長が3､6m余りの長大な書状であり､内容は多岐にわたるが､第４巻に掲載した部分は、ペリー来航に際しての幕府の対応と、それに対する三田藩の対応・考え方を知ることのできる部分である。書状からは、ペリーの来航に対して幕府が全大名に意見を求めたこと。ペリーの要求が容易なものではないこと。その和解（わげ＝翻訳）がなかなか入手できないことなどが述べられている。また、藩士を兵として差出すことになった場合、三田藩では｢具足｣(よろいなどの戦時の着具)と武器が絶対的に不足していることも記されている。

隆継は、具足はともかく武器を装備せずに戦場に向かうことは「御家之御恥辱」と認識している。このような一種の気概は、明治４年(1871)の藩あげての帰農願(市史近代資料Ⅰ資料22参照)への萌芽とみなすことも可能である。

また、後半にある12代将軍徳川家慶の死因のひとつがペリー来航による心労であったという噂は同時期の別の資料にも記されており、当時の認識のありようとして興味深い。

なおこの２人の間の書状はほかにも多くあり、江戸と三田の間での情報伝達が緊密に行われていたことも、幕末における情報収集を考える手がかりとして注目しておきたい。

４　今後の幕末三田藩研究の課題

現在の研究状況は、個別具体的な資料からわかる事実を積み上げている段階である。

海岸の警備は元来譜代大名が負担するのが通常であったが、ペリー来航以降はすべての藩を動員するようになった。そのことで三田藩の対応を素材として幕末の政治状況を考えることも可能になっている。幕府がすべての大名を動員した背景には、第一には、数で対応するという考え方。第二には、幕府の軍事的な威信を誇示するためにあえて動員をかけたことが考えられる。これらの点を、ペリー来航に際し全大名から意見を聞いたこととともあわせて考えるならば、幕府の威信の低下を示す出来事としてとらえることも可能であろう。